

# 韓国における『古事記』研究(四)

—二〇一〇～二〇一一年の学術論文を中心に—

田 中 千 晶

韓国における『古事記』の専門的な研究は近代から始められ、特に一九八〇年代以降、本格的に研究が進展し、近年では年間十数本の研究論文が発表されている。『古事記』に関心を寄せる理由として、韓国に関連した記述の存在、神話の類似性などが指摘されている<sup>(1)</sup>。

本稿では、近現代における『古事記』の受容研究の一環として、韓国ではどのように『古事記』が研究されているのか、また用いられているのか、近年の学術論文を紹介する。今回紹介する二〇一〇～二〇一一年の特徴としては、「海」に着目した論考が増加し、中でも日本海側の島根県や「イナバのウサギ」に関して論じられ出したことである。

二〇〇〇年までの研究動向及び、二〇〇〇年～二〇〇九年における研究論文リストに関しては、拙稿<sup>(3)</sup>を参照されたい。



## 研究年表(二〇一〇～二〇一一年)

| 題目 |                                     | 著者  | 学術誌名、巻号    | 発行所          | 発行年    |
|----|-------------------------------------|-----|------------|--------------|--------|
| 1  | 須佐之男神神話解釈の問題―韓半島との関連性を中心に           | 朴奎泰 | 宗教と文化 19   | ソウル大 宗教問題研究所 | 二〇一〇・一 |
| 2  | 日本ニニギ神話の中の降臨地に関する一考察―“高千穂”説の妥当性のために | 魯成煥 | 東アジア古代学 21 | 東アジア古代学会     | 二〇一〇・四 |
| 3  | 『古事記』の天石屋物語再考―「咲」を中心に               | 朴美京 | 東アジア古代学 21 | 東アジア古代学会     | 二〇一〇・四 |
| 4  | 高御産巢日神の一考察                          | 崔元載 | 日本語文学 51   | 日本語文学会       | 二〇一〇・四 |

※番号に□を付した論文は後に要旨を記載する。

論文の検索については、RISS (Research Information Service System)<sup>(4)</sup>を基本とし、補助的にK S I学術論文情報と DBpia<sup>(6)</sup>を用いた。R I S Sで検索対象を韓国内学術誌の論文とし、キーワード「古事記」で検索すると、二一九件がヒットした<sup>(7)</sup>。このうち本稿では、紙幅の都合上、二〇一〇年～二〇一一年の二年間について紹介する。この期間では二十三件の検索結果が得られたが、題目や本文内に加え、論文のキーワードとして登録されている「古事記」も検索されるため、論文の主旨が『古事記』と異なるものも含まれている(研究年表の11、18等)。しかし『古事記』が各方面の研究分野からどのように用いられているかを知るためにも、件数に含めることとする。すべての研究論文の内容を紹介することは困難であるため、発行年順に題目等を記した研究年表を挙げ、一部の論文について要旨を掲載した<sup>(9)</sup>。二〇一二年以降の論文に関しては、後の機会に譲ることとする。

|    |  |      |                |               |         |
|----|--|------|----------------|---------------|---------|
| 23 | 韓国の梧桐島と日本の因幡のウサギ説話の比較研究                              | 魯成煥  | 口碑文學研究 33      | 韓国口碑文学会       | 二〇一一・一一 |
| 22 | 芥川龍之介の「素戔嗚尊」論  | 李ミンヒ | 日本學報 89        | 韓国日本学会        | 二〇一一・一一 |
| 21 | 日本の波兎紋の起源と活用に関する研究―波兎紋と日本神話                          | 魯成煥  | 日語日文学 52       | 大韓日語日文学会      | 二〇一一・一一 |
| 20 | 日韓始祖神話の性格―「神武」と「朱蒙」の人物形象                             | 全英希  | 日語日文学 52       | 大韓日語日文学会      | 二〇一一・一一 |
| 19 | 日本の『古事記』神話とメソポタミアのシムメル神話                             | 金采洙  | 日本文化研究 40      | 東アジア日本学会      | 二〇一一・一〇 |
| 18 | 『日本沈没』の「國土」思想  | 金榮心  | 日本語文化 19       | 韓国日本語文化学会     | 二〇一一・〇九 |
| 17 | 文字無き古代日本の実現―『古事記伝』の『古事記』序の読みを中心に                     | 裴寛紋  | 日本文化學報 50      | 韓国日本語文化学会     | 二〇一一・〇八 |
| 16 | 島根の中の朝鮮文化について―記紀や出雲国風土記・神社に見る古代出雲と古代朝鮮               | 金秀明  | 韓日語文論集 15      | 韓日語日文学会       | 二〇一一・〇八 |
| 15 | 『古事記』『日本書紀』の神話に描かれた「海」と「東海（日本海）」                     | 李昌秀  | 日語日文学研究 78-2   | 韓国日語日文学会      | 二〇一一・〇八 |
| 14 | 記載されない求婚譚―『古事記』雄略天皇のカラヒメ求婚譚の探索                       | 瀬間正之 | 日本研究 12        | 釜山大學校日本研究所    | 二〇一一・〇六 |
| 13 | 『古事記』を中心   | 朴美京  | 人文学研究 82       | 忠南大學校人文科学研究所  | 二〇一一・〇四 |
| 12 | 日帝強制占領期の日本語教科書で見る日本神話―朝鮮総督府発行『普通學校國語讀本』と『初等國語讀本』を中心に | 李昌秀  | 比較文化研究 22      | 慶熙大學校比較文化研究所  | 二〇一一・〇三 |
| 11 | 砂錢製鍊と大刀冶匠に関する日本古文獻資料の検討                              | 廬泰天  | 百濟學報 6         | 百濟學学会         | 二〇一一・〇一 |
| 10 | 古代日本人の想像力を通じてみた日本神話―古代韓日交流を中心に                       | 具廷鎬  | 日本學研究 32       | 檀國大學校日本研究所    | 二〇一一・〇一 |
| 9  | 神武天皇と舒明天皇の国見研究                                       | 李相俊  | 東アジア古代学 23     | 東アジア古代学学会     | 二〇一〇・一二 |
| 8  | アマテラスの変貌―古事記・日本書紀・狭衣物語を中心に                           | 韓正美  | 日語日文学研究 75-2   | 韓國外國語大學校日本研究所 | 二〇一〇・一一 |
| 7  | 『古事記』に現れた海神に関する考察                                    | 李昌秀  | 日語日文学研究 75-1-2 | 韓國日語日文学会      | 二〇一〇・一一 |
| 6  | 『古事記』と『日本書紀』の研究史―スサノヲ神を中心に                           | 崔震甲  | 日本文化研究 36      | 東アジア日本学会      | 二〇一〇・一〇 |
| 5  | 日本神話の変容と体系化―国土創世神話を中心に                               | 李昌秀  | 日本研究 45        | 韓國外國語大學校日本研究所 | 二〇一〇・〇九 |

論文要旨 (年表より抜粋)

3 朴美京 『古事記』の天石屋物語再考―「咲」を中心に (『東アジア古代学』 21、東アジア古代学学会、二〇一〇年四月)

様々な議論がなされてきた『古事記』の天石屋物語の再考を試みたもの。特に『古事記』の編者が、かなり意識的な用字意識のもとに、無文字時代から伝わっている古伝承を記録すべく努力していたことは、すでに知られている通りである。このような『古事記』の文字表現の世界を突き詰めるべく考察を続けている筆者による論考である。まず、『古事記』における「咲」の用法とその使われ方の状況お

び、『日本書紀』における「咲」の用法と使われ方の状況を中心に検討した。その結果、両書における「咲」は、ほとんど何か自分以外の対象があつて、それから受ける印象に基づいて喜びや楽しみのような肯定的な意味合いでの「咲」もあれば、否定的意味合いを持つものもあるということが判明した。このような「咲」の用法を考慮に入れ、『古事記』の文脈上、天石屋物語における「咲」の役割やその意味などについても考察した。その結果、『古事記』の天石屋物語における「咲」は、従来のように「笑いの爆破による賦活の呪能」や「悪霊を追い払おうとする、あるいはその爆発哄笑によって悪しき現状を変えようとする演出」などではなく、皇祖神天照大御神の至高性と健在さを裏付けるためのきつかけ作りであることを指摘した。

〔4〕崔元載「高御産巢日神の一考察」（『日本語文学』51、日本語文学会、二〇一〇年四月）

天孫に降臨を命じた神、つまり司令神のうち、タカミムスヒに焦点を当ててその神の特質や性格などを明らかにし、アマテラス以前の皇祖神の原態について考察した論。『古事記』と『日本書紀』の天孫降臨神話には、司令神に焦点を絞ってみると、タカミムスヒ系の降臨神話と、アマテラス系の降臨神話、また両方を統合した形の三種類の降臨神話があり、皇祖神の二元構造が浮かび上がってくる。そこで本来の司令神を追求してみた結果、天孫降臨神話は本来の司令神であるタカミムスヒがホノニニギを直接降臨させる伝承であり、アマテラスよりタカミムスヒが本来の命令神・司令神と意識されていたとする。タカミムスヒの神格については、タカミムスヒを日の神（＝太陽神）と想定した上で、さらに古代韓国の諸国の始祖伝承を考察し、その結果、そこには天・天帝＝日神（太陽神）の観念を含み持ち、それをもってタカミムスヒ＝日神は古代韓国に見られる天の至高神（＝日神）の到来によるものと捉えた。その理由として、顯宗紀三年の記事からタカミムスヒ信仰の軌跡が朝鮮半島に近い対馬や壹岐あたりと密接なかわりをもっていることを挙げていく。

〔5〕李昌秀「日本神話の変容と体系化―国土創世神話を中心に」（『日本研究』45、韓國外國語大學校日本研究所、二〇一〇・九）

古代の大和における皇室の想像力世界の総和である『古事記』『日本書紀』に描かれた体系神話のうち、いわゆる「国生み神話」は、大八洲国と称される日本国土の起源と古代皇室の地理的な観念が示してあり、かつ日本民族と国土を血縁関係に結び付ける日本型「身土不二」思想の原点とも言える。その構造を確認すると、『記』はイザナキ・イザナミの成婚によりオオヤシマが産まれるまでの物語が一つの筋にまとめられているのに対し、『紀』では「神代巻」第四段の本文と一書に十一の関連伝承が短編のように記されているほか、記事間での差も少なくない。この差を確認した上で、まず『紀』一書の記事を綿密に分析し、本文と比較し、さらに『記』の神話とも対照して国生み神話の変容と体系化の過程を探った。その結果、

『紀』一書には、比較神話学の見方から、各々民間伝承のような神話の原型が比較的那のまま保存されており、それがオノゴロシマ形成やオオヤシマの出産という形に変容されたものと見られる。この伝承は天神観念や儒教観念、陰陽神の契りといった神話要素を組み入れ、『紀』本文や一書第一のように一次的な体系化を受ける。一方、『記』における国生み神話は『紀』の変容と体系化の過程で起きた問題を補いつつ、イザナキ・イザナミを天神の系譜が受け継がれた高天原の神とし、いつそ完成度を高めようとした編纂意図が見受けられる。そこにはより正確な地理的な観念と対外境界線、さらには古代日本の皇室の海外交流役を果たした氏族の活躍をも反映した痕跡が見られ、つまり『記』の国生み神話は上記のような編纂意図の下で最終的に完成したもつとも新しい伝承構造を持つと結論づけた。

〔6〕崔震甲「『古事記』と『日本書紀』の研究史―スサノヲ神を中心に」（『日本文化研究』36、東アジア日本学会、二〇一〇・一〇）

この研究の目的は、記・紀の神代において三貴子の一柱であるスサノヲに関する研究史の考察に依り、今後のスサノヲとアマテラスの研究における土台を用意すること、とされる。『古事記』の伊邪那岐命が黄泉の国の穢れを無くすため禊を行う時、右の目からアマテラスが、左の目から月読の命が、そして鼻からスサノヲが生まれる。この三柱の神を三貴子と呼んだことから、皆が善神であったとみられる。ただし、『日本書紀』第五段本書の三貴子の誕生条では、イザナギとイザナミによって、生まれたばかりのスサノヲの悪い神格が問題になり、スサノヲは遠い根の国を治めるよう命じられている。このことからスサノヲの神格は『古事記』とは正反對にみられるが『日本書紀』は記述が大幅に簡略化されている。『古事記』の方が理念的にも一本化して透徹し、組織的にもはるかに壮大であり形象も豊かであることから、『日本書紀』にはスサノヲの神格の形成過程に対する時制が省略されていると推察する。この『日本書紀』の、省略されたと思われる所に『古事記』の時制を入れてみると『日本書紀』のスサノヲは『古事記』と同じく生まれたばかりの神格は善神であると考えられる。筆者によれば、三貴子は皇祖神の神格に関わりがあるために、日本側の研究は皇国史観に対して否定的な論文、すなわち、スサノヲを

善神として書けなかったのが現実であった。研究史にも現れるように、日本側の研究は皇祖神であるアマテラスは一方的に善神、スサノヲは悪神として分類しているが、韓国側の研究はスサノヲの神格を善神と悪神、両方に分類しているとする。

7 李昌秀「『古事記』に現れた海神に関する考察」(『日語日文学研究』75-2、韓国日語日文学会、二〇一〇・十一)

記紀神話に描かれている神々の伝承を素直に見ていくと、高天原の正統性を受け継いだ天孫が地上世界に天降り、そこを統合しつつ王権を確立するという古代皇室の政治的な意図に基づき、数回の改作と潤色を加え、変容され且つ体系化した神話、ということが出来る。とはいえその神話は、主な舞台が海、または海に面した地域を中心に繰広げられがちである。この海は特に、『古事記』上巻に描かれている創世神話を始め、国生み神話の源泉となっており、時には黄泉国のように海上他界への通路として、さらに常世国のように現世に豊かさをもたらす理想郷というイメージをも持っている。一方、海神といわれる「ワタツミ」という神は、その誕生の場面では単なる海そのものを意味するかも知れないが、神話の筋から見ると、自然の神という観念を越え、海を生活の場としつつ成長した古代日本の地方豪族である安曇氏により祖神と祭られ、しかも漁業や海外交流において航海の安全を守ってくれる守護神としての意味を持っている。このような点から、『古事記』における「ワタツミ」は海に関わった様々な神々を統合した代表の神として生まれたと言える。また、日本神話の最後の伝承と言える山幸彦の海神宮訪問譚における「ワタツミ」は、天降りした天孫に海の呪力を与えることによって皇室の権威を陸地と海を制覇した正統性を一層極大化させる存在として浮彫りになっている。そこには「ワタツミ」を通して海上の権能を強調することによって、皇室と親しい関係を保ちながら、中央朝廷に忠誠心を示そうとした安曇氏の政治的な意図が反映されたことが窺える。

8 韓正美「アマテラスの変貌―古事記・日本書紀・狭衣物語を中心に」(『日本研究』46、韓國外國語大學校日本研究所、二〇一〇・十二)

『古事記』『日本書紀』『狭衣物語』など、上代のテキストから平安物語までを中心に、アマテラスがそれぞれのテキストの中にどのように描写されているか、その神格の役割と位置とはどのようなものか、というアマテラスの変貌の様相について考察した論である。『古事記』上巻においてアマテラスは大御神としての最高神として登場していたが、『日本書紀』においては日神(ヒルメの神)としてその神格を現していた。天の岩戸の物語においてもアマテラスは、『古事記』の中では天地の世界を貫く秩序原理として描かれているのに対し、『日本書紀』の中では崇神としてのイメージを現していた。また、天孫降臨においてアマテラスは、『古事記』だけに皇祖神としての神威を現していたが、神武天皇の東征においては、『日本書紀』にも「日神」とともに「皇祖天照大神」として描写されており、神武天皇段においてアマテラスは「日神」と「皇祖神」の二重神格として認識されていたことが分かる。このように記紀神話において、大御神・太陽の女神・崇神・皇祖神として変貌を遂げたアマテラスは、平安物語である『狭衣物語』においては、全て皇位及びその継承に関わっており、皇祖神として機能することによって、新帝即位による新しい秩序を正統化させているとする。

10 具廷鎬「古代日本人の想像力を通じてみた日本神話―古代韓日交流を中心に」(『日本学研究』32、檀国大学校日本研究所、二〇一〇・一)

日本神話における物語的要素を史実として読むことによって、古代日本人の生活や想像力を検討した論。神話は神の物語ではあるが、その書き手が人間である以上、神話の中からは当然、当時の人間の模様が滲み出てくるはずである。特に古代史において、微妙でありながら密接な関係をもつ韓国と日本との間には、確かに影響関係もかがまれる。古代の韓日関係における資料は限られたものであるため、韓・中・日の古代文献所収のわずかな分量の資料をもってその影響関係を考えると、ということ自体、そもそも困難である。しかしながら最近では文献資料以外にも考古学的な資料が古代の実相を補足したりする。限られた資料ではあるが、それを丹念に

読むことによつて、今まで見つからなかった新たな古代人の想像力を発見することができるだろうと、筆者は推測する。このような観点から、古事記神話の中で、イザナキ、スサノオノ命、ニギノ命の神話を中心として、日本神話における高天原にかかわる古代日本人の思考の底辺を検討した。その結果、神話の書き手の思考の中に位置づけられた高天原は、古代の朝鮮半島であったということが確實であると結論づけた。

〔15〕李昌秀『古事記』『日本書紀』の神話に描かれた「海」と「東海（日本海）」（『日語日文学研究』78—2、韓国日語日文学会、二〇一一・八）

前出7の論文の続編ともいえる論考。『古事記』『日本書紀』の神代に描かれている神話伝承の主舞台は海、あるいは海に面した地域という印象が強い、ということを確認したうえで、特に日本の創世神話と国生み神話は言うまでもなく海と親しい関係にある人々による自然な発想が見られると述べる。古事記神話における至高神にあたるアマテラスはイザナキが海水で禊祓いを行うことよつて生まれることから、海という世界は神聖性の源泉と言える。また、神話の最終伝承にあたる山幸・海幸伝承は、王権を完成する過程における海と海神の呪能が強調され、かつその伝承は神武天皇が内陸を通さず海上のルートで大和に進出するという神話的な発想と直接に結び付いている。このように日本の神話は一貫して繰り返し海との関係が深い。そしてその海は、韓国と日本のある東海（日本海）をさす傾向が強い。国生み神話における島々の誕生の内訳を見ると、古代朝鮮半島との海上交流ルートである壹岐や対馬が含まれており、佐渡島と隠岐島は大和朝廷の外部との境界線を東海に設定したことを暗示する。また、実際の地名にあげられている出雲や日向も海に面している地域であり、この地域の祭神や神社の位置もすべて東海に向かっている。このように日本神話は海を思い浮かべ、海に繋がっている。これは日本の自然風土がもたらした海の想像力の表現であり、日本神話の形成に海人勢力が重要な役割を果たしたことを意味する。しかも東海を生活の場にさせた海人勢力が、日本の古代王権と古代国家の形成過程に少なくない背後役割を演じたことを反映している、と論じた。

〔16〕金秀明「島根の中の朝鮮文化について—記紀や出雲国風土記・神社に見る古代出雲と古代朝鮮」（『韓日語文論集』15、韓日日語日文学会、二〇一一・八）

『古事記』と『日本書紀』と『出雲国風土記』の中の古代朝鮮に関係すると考えられる技術箇所などを抽出して、日本神話と朝鮮神話の共通性や類似性、相違性と独自性などの特徴を比較し、当時の日本社会と朝鮮社会の構造の差を明らかにする。神話における素盞鳥尊と五十猛神が新羅からの渡来神であることに関連して、神話の中には渡来人の集団によつて伝えられた話である可能性が高いと考えられる話があることを指摘する。また、島根県内に存在する、朝鮮と関係のある祭神の祭事を行う神社の中には大陸の地名に関係があると考えられるものがあることから、大陸関係の人名とのつながりを推測し、さらに、それらは職能に関係すると推測した。このようなことから、古代朝鮮（AD2〜3世紀中旬）の馬韓・辰韓・弁韓や伽倻帝国や新羅から出雲地方に渡来人が移住定着して、産銅や産鉄文化を伝承していた可能性があることなどを明確にするのを目的とした論考。

〔19〕金采洙「日本の『古事記』神話とメソポタミアのシムメル神話」（『日本文化研究』40、東アジア日本学会、二〇一一・十）

日本の『古事記』神話と天孫降臨神話、古代中国の神話世界と黄帝神話、鉄器時代の西アジアの神話世界と青銅器時代のシムメルの十二天神等に関する比較検討を通じて、古代日本の『古事記』神話の中の十二天神とシムメル神話の十二天神との関連性を考察した論。その結果『古事記』神話は、天孫の降臨、彼らの山頂への降臨、および十二天神等を主軸にして確立されると主張した。また『古事記』神話のそのような特徴は、古代日本の神話世界が形成されてきた過程において出来た独自の特徴では決してない、とする。『古事記』神話がそのような特徴を持っていることになったのは、同様の特徴を持っていた古代中国、古代インド等の神話世界等からの影響の下で形成されてきたためである、と結論づけた。

[20] 全英希「日韓始祖神話の性格―「神武」と「朱蒙」の人物形象」(『日語日文学』

52、大韓日語日文学会、二〇一一年十一月)

日本の『古事記』『神武天皇』の記事と韓国の『三国遺事』『朱蒙神話』が同じ始祖神話でありながら王権もしくは建国という修飾語が交錯していることに着目し、比較検討したものの。従来の検討では、神話の特徴を捉え、類型化するという課題を解決するために、概ね民族起源説および民族由来における経路の検討が行われてきたが、本論は従来の研究では等閑に付されがちであった始祖王なるものの人物像に注目している。始祖王の人物に投影されている人物の性質を把握することにより、神話の志向することが何であるのかを明らかにしようと試みた論。従来、建国の英雄として捉えられがちであった神武天皇は、英雄としての側面よりは、どのような過程によってその血統を認められているのか、という謂わば正統性を強く追求している側面が窺えた。つまり『古事記』の神武天皇の話の場合は、血の正統性を強く語っていることがわかる。これに比して、「朱蒙神話」における朱蒙の人物像は、神聖なる血の継承者という側面よりは、朱蒙自身が王なる者の英雄的な能力の持ち主であるがゆえに、新しく国を開拓して建国に至っていることが強調されていることがわかる。検討の結果、王権の論理には何より正統なる根拠が、建国の論理には何より正当なる根拠が強く求められている、という結論を導いた。

[23] 魯成煥「韓国の梧桐島と日本の因幡のウサギ説話の比較研究」(『口碑文學研究』

33、韓国口碑文学会、二〇一一年十一月)

韓国の麗水、梧桐島には海に住む亀をだまして鳥を行き来するウサギの話がある。これと最も似た話が日本の古代文献である『古事記』に載せられている。このことから、多くの人々がこの説話をめぐる韓日の影響関係について言及してきた。石波洋は『古事記』の説話が韓国のものに比べて時代がはるかに先んじるため、梧桐島のウサギ説話は植民地時代の日本の影響から生じたものと解釈した。しかし、これと類似の説話が朝鮮時代の文献である『古今笑叢』にも発見されたことから、植民地時代とは何らの関連がないということが明白になった。梧桐島のウサギ説話はベトナム、中国、日本のものと同じで東アジア型に属し、この造形がベトナムに

あったことから考えて、ベトナムから中国を経つつ、韓国に伝来したものと推測される。ベトナムでは自分を欺いた水中動物が陸地動物に反撃を加えて殺す単純な動物譚になっているが、それが中国に伝わると、ウサギの尻尾が短い理由を説明する話に変化し、登場する動物もウサギとスッポンになった。そしてそれが再び韓国に伝わると、ウサギはそのまま受容されるが、スッポンは再び亀に変わり、反撃の内容は亀がウサギの皮をむいて、それを治療する神の内容に発展した。これが日本に伝えられてウサギの傷を治療する神々の話として『古事記』に編入された。このように麗水の梧桐島の説話は、その源流の発生地がベトナムにあるのであり、決して日本にあるのではなかった。石波の解釈のように、韓国のウサギ説話は植民地時代に日本から影響を受けて発生したのではない、と結論づけた。

注

- (1) 魯成煥「神話学から見た韓国の日記研究」(『國文學 解釈と教材の研究』51―1 學燈社 二〇〇六年一月)
- (2) 研究動向に関しては注(1)及び、金祥圭「韓国における日本神話研究の現状」(『古事記年報』46 古事記学会 二〇〇四年一月)を参照した。
- (3) 田中千晶「韓国における『古事記』研究(一)―二〇〇〇―二〇〇二年の学術論文を中心に」(『水門』25 勉誠出版 二〇一三年一月)、同「韓国における『古事記』研究(二)―二〇〇三―二〇〇六年の学術論文を中心に」(『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』50 二〇一四年三月)、同「韓国における『古事記』研究(三)―二〇〇七―二〇〇九年の学術論文を中心に」(『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』51 二〇一五年三月)
- (4) RISSは韓国教育情報院によるデータベース。韓国内学術誌論文、海外学術誌論文、学位論文、単行本、学術誌などを検索できる。韓国内の学会及び大学附設の研究所が発行する学術誌の論文は約三五〇万件、学位論文は約一一四万件が収録されている。(収録数は二〇一三年十二月末基準) <http://www.riss.kr/index.do>
- (5) KSI韓国学術情報(Korean Studies Information, KSI)によるデータベース。韓国内二〇〇余の学会及び研究所と著作権契約をしており、学会誌及び研究刊行物に掲載された約九〇万件的論文をPDF化し収録している。 <http://www.papersearch.net/>
- (6) NuniMedia社が韓国最大の書店・教保書店とともに提供する学術情報データベース。約一七〇万件的論文、一八〇〇種の刊行物を収録(二〇一四年三月基準)。 <http://www.dpia.co.kr/>

- (7) 二〇一五年十月二十五日現在。漢字「古事記」もハングル表記「고사기」も同数の二十九件である。
- (8) 韓国の学術誌に掲載された日本人研究者の論文を含む。
- (9) 年表には日本人研究者による論文も掲載した。要旨は、原則として韓国人名の筆者による論文を選択し、私に翻訳し要約あるいは筆者による要旨を簡略化した。論文名等は適宜日本語に変えた。

## “Kojiki” studies in South Korea (4)

— Academic papers from 2010 to 2011 —

TANAKA Chiaki

**Abstract** : In this article, I introduce the study of “Kojiki” researches in South Korea. I will analyze the academic papers on “Kojiki” after 2000. South Korea has worked on its researches in full scale the 1980’s.

The similarity of the myths of Japan and South Korea, and the descriptions of the Korean Peninsula have been discussed there.

**要旨**：韓国においては、近代に入ってから『古事記』の研究が始められた。朝鮮半島に関する記述の存在、神話の類似性などが研究対象として関心を持つ理由であり、本格的に研究が進展してきたのは1980年代以降である。その研究方法は大きく次の二つに分けることができる。一つは日韓の神話を比較し、日本にいかにか文化的影響を与えたかを解明する研究、今一つは『古事記』『日本書紀』の特殊性をそれぞれのテキストに分離して探る研究である。方法の異なる両者を結び、且つ韓国の『古事記』研究の転機となった研究が、魯成煥『日本神話の研究』（報告社、2002年9月）といえる。本稿ではこの『日本神話の研究』を転換点とみなし、刊行前夜にあたる2000年以降、どのような視覚から『古事記』が研究されているのかについて、韓国内における学術論文を紹介する。